

肢体不自由をもつAさんが通常学級で共に学ぶための支援の工夫
— 体力・学力の向上，交友関係の充実化に向けた学びやすい環境づくりの工夫を通して —

宮城県女川町立女川小学校
教諭 佐野 仁 美

1 主題設定の理由

Aさんは、脳性まひによる上肢機能並びに移動運動機能障害をもつ小学6年生の女子児童であり、両足に装具を付けて生活している。最後まであきらめない強さと、明るさが強みであり、友達との関係は良好である。しかし、障がいによって難しいと自分で判断した活動には、できないと決めつけ、大人を頼ることも多かった。

力の入れ具合を調整することが難しく、手足を思うように動かすことができなかったり、全身のバランスをとることができず、少しの衝撃で転倒してしまったりすることがある。そのため、いろいろな活動に消極的な姿勢が見られた。

また、ノートをとることに時間がかかるため、前で話す教師の話に集中することができない。そのため、周囲の学習ペースから遅れ、苦手な単元をそのままにすることもあった。

Aさんは平成28年度の4年生まで、通常学級に在籍していた。本校は、平成27年度より、県の「共に学ぶ教育推進モデル校」に指定され、平成29年度までの3年間、専門家の方々からAさんの学びやすい環境づくり等について、御助言をいただいた。

平成28年2学期の中頃、保護者は、肢体不自由の困難さを改善する学習が必要であると感じ始め、本人の意向もあり、平成29年度より肢体不自由児特別支援学級（以降「特別支援学級」と表記。）へ入級することとなった。

Aさんが特別支援学級への入級を決意することは、簡単なことではなかった。そのため、入級後のAさんの不安を最小限に抑え、できる限りそれまでと同じように友達と共に学習することができるようにした。これまで以上に学びやすく、学ぶことの楽しさと友達と同じようにできるという自信を持ってほしいと考え、本研究主題を設定した。Aさんが特別支援学級に入級し、Aさんを担任した平成29年度4月から翌年3月までの1年間の実践をまとめた。

2 研究目標

自立活動の時間を中心に、協力学級で学ぶための訓練をしたり、教材・教具の工夫をしたりすることにより、体力・学力の向上，継続した交友関係の充実化を図り、協力学級で共に学ぶことができるようにする。

3 研究仮説

自立活動を中心に、肢体不自由をもつAさんが学びやすい環境を整備し、体力・学力・交友関係に対して自信をつけさせれば、協力学級で共に学ぶことができるであろう。

4 研究内容

（1）体力の向上のために

①階段の昇降練習

本校は4階建てであり、教室移動の際に階段の昇降が必要である。Aさんは協力学級の児童の列から遅れてしまうため、できるだけ速く階段を昇降するための練習を行った。具体的には、毎日の教室移動のとき、担任がAさんの背後か正面から「いち、に！」の声掛けをし、テンポよく足を動かす練習を行った。また、時間に余裕があるときに、階段昇降にかかるタイムを計り、教室に記録を掲示し、変化が一目で分かるようにした。



階段の昇降練習

②正しい姿勢で走る練習

Aさんは走るときに太ももから足を上げることが難しく、足を引きずってしまうことがある。全身のバランスをとることも難しいため、大きく腕を振るとバランスを崩してしまう。そのため、4～5月の間、5年生の体育「走の運動」の授業中、Aさんは担任と一緒に他の児童と別メニューで正しい姿勢で走る練習をした。最後まで太ももに力を入れて足を高く上げて走ること、大きく腕を振ったときに正面を向き続けること等を声掛けし、練習を行った。

③登山への挑戦

本校5年生は、「花山自然教室」で9月に御駒山登山を行っている。事前に、Aさんと保護者に、登山に向けた思いや不安の聞き取りを行った。Aさんも保護者も、ともに登山をすることを決断し、それまで以上に足を上げて歩いたり、障害物をまたいだりする練習を行い、登山に備えた。登山まで、当日のコースや予定等について、保護者と綿密に打ち合わせを行った。また、登山への目標を自分で決めさせ、教室へ掲示した。登山当日は、Aさんは他の児童より30分早く出発し、登頂の時刻を他の児童に合わせたり、比較的短距離で頂上へ行くことができるコースを通ったりして、友達と登頂の喜びを分かち合えるよう工夫した。

(2) 学力の向上のために

①ノートのとりの練習と声掛け

Aさんは、IQ90(WISC-IV 平成28年1月26日検査)であり、知能的な課題はほとんどない。自立活動以外の教科を協力学級で学んでいるが、手を素早く動かすことが難しく、質問することや発言することがなかった。そのため、自立活動で板書内容を単語ずつ区切って書くのではなく、一文ずつ一気に覚えて書く練習を行った。協力学級では、T1の教師から板書終了の指示が出たら、続きは隣にいる担任へお願いし、Aさんは前を向いてT1の話を聞くように、ノートをとる量を負担過重にならないよう工夫した。

②机と椅子の整備

Aさんは、座位の姿勢でも、正しい姿勢を保つことができず、授業に集中すると、左に傾いてしまう。そのため、肢体不自由児用のカットアウトテーブルを用意し、特別支援学級と協力学級それぞれに1台ずつ設

置した。また、椅子は肘置き付きの養護椅子に、傾く方の右側に仕切りを付けて、正しい姿勢を保つことができるように工夫した。



カットアウトテーブル



仕切りを付けた養護椅子

(3) 継続した交友関係の充実化のために

①特別支援学級の開放

Aさんの特別支援学級と協力学級は、廊下を挟んで向かい側にあり、気軽に往復することができる。この距離感を利用して、特別支援学級にたくさんの児童が来室するよう、教室を常に開放した。また、教室の掲示も工夫し、Aさんの自立活動の様子や、目標達成の記録等を掲示し、他の児童の特別支援学級への理解を図った。



自立活動を紹介するAさん

②作品作り

Aさんが他の児童と同じようにいろいろなことができることや、頑張っていることを他の児童に目に見える形で伝えるため、手指の運動として、いろいろな作品を作る活動を取り入れ、教室に展示した。休み時間に来室した児童と一緒に、自立活動で行った活動を楽しむことができるよう、作品の作り方や材料、風船バレーの用具等を常備した。また、いろいろなことにチ

チャレンジさせるための一つの活動として、「東京2020オリンピック・パラリンピックに向けたポスター募集」への作品応募について声掛けし、自立活動の時間を使ってポスターを作成させた。



作品作り

③町民弁論大会への参加

平成29年6月「スポーツ笑顔の教室」として、元車椅子バスケットボール選手の京谷和幸さんが来校し、自身の障がいと夢、出会い、感謝についてお話をいただいた。京谷さんとの出会いをきっかけに、Aさんは自分の障がいや、理想の社会について考えるようになった。その思いをたくさんの人に知らせることが、これから先のAさんの自信と成長につながると考えたため、町民弁論大会への参加を勧め、Aさんは参加を決めた。

5 研究の成果

(1) 体力の向上のために

①階段の昇降練習

毎日階段を昇降するとき、必ず担任がAさんの背後

か正面に立ち、「いち、に！」と声掛けをすることで、Aさんも「いち、に！」と言い、リズムをとりながら昇るようになった。「いち、に！」の掛け声をAさんの好きな歌に変えると、ますます意欲的に速く昇ることができるようになった。また、他の児童が、Aさんや担任が階段を昇るたびに、掛け声や歌を歌って楽しそうにしているのを見ると、一緒に掛け声をしてくれたり、歌ったりして、Aさんの練習に付き合ってくれるようになった。担任が不在のときでも、通りかかった児童が「先生、私がAさんと一緒にいきますよ！」と声を掛けてくれることもあった。

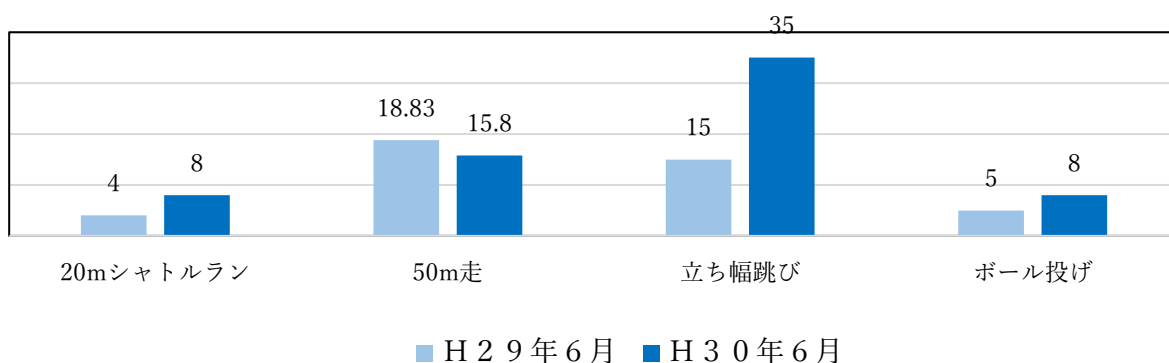
下りでは、4月当初は両手で手すりを掴み、一段に二歩ずつ下っていたが、昇りと同じようにできるだけリズムをとりながら下ることを目標にすると、片手のみ手すりをつかむ状態で一段一歩ずつ下ることができるようになった。

階段昇降のタイムを教室後方の壁に掲示したことにより、Aさんのもっと頑張ろうという思いが強くなり、階段昇降のスキルの向上につながったと考える。また、通りかかった友達から「Aさん、階段昇るの、速くなったね！」と称賛されることで、意欲が高まったと感じる。今では、協力学級の列から遅れることなく階段を昇降することができるようになった。このことから、毎日の階段昇降練習は、Aさんの体力の向上に有効な支援であったと言える。

②正しい姿勢で走る練習

「もも上げ」と「腕振り」を合言葉に練習に取り組んだ。その結果、走る機会があると、必ず合言葉を意識しながら走るようになった。また、タイムを計るごとに、自分の何がいけなかったか、どこを改善すれば

体力・運動能力テストの結果



もっと速く走ることができるようになるかを考えたり、担任に聞いたりすることができるようになった。5月の運動会の徒競走の練習では、初めて友達を抜かすことができ、飛び跳ねて喜んでいて、また、体育の走る以外の種目でも、体育の時間に別メニューでいろいろな種目の動きを細かく確認しながら練習し、少しずつ体力をつけた。体力テストの数値にも向上の跡が顕著に表れたことから、正しい姿勢で走る練習や、部分的な別メニューでの個別の練習は、Aさんの体力向上に有効であったと言える。



運動会【徒競走】

③登山への挑戦

当日まで保護者と綿密に話し合っ準備をしていたため、Aさんも担任も、不安なく出発することができた。登山中は、何度も転んだが、出発時に応援してくれた友達のことを思い出しながら、自分で決めた「登頂」に向かって、一度も弱音を吐くことはなかった。自分の力で登頂するという自信をつけさせたかったため、登山中は、どこに足を置いたら良いか、どこを掴

んだら良いか、全て自分で考えさせた。試行錯誤していたが、担任の手を掴みながら、ほとんど自分の力で登頂することができた。登頂すると、友達に驚かれ、称賛されて満面の笑みを浮かべていた。また、登山以降、どんな障害物も自分の力で越えようとする姿勢が見られ、この登山はAさんの体力向上はもちろんのこと、挑戦する心の成長へもつながった。



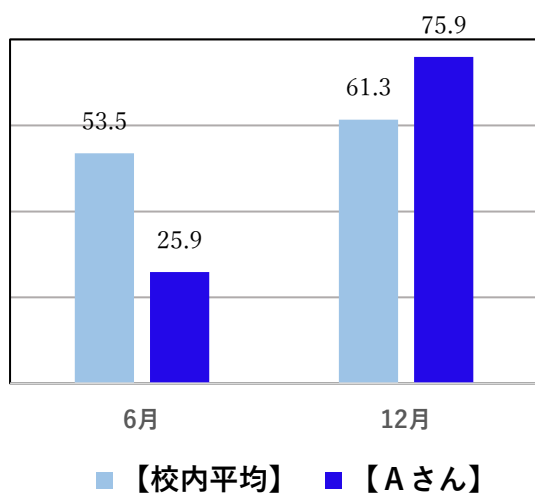
御駒山登山

(2) 学力の向上のために

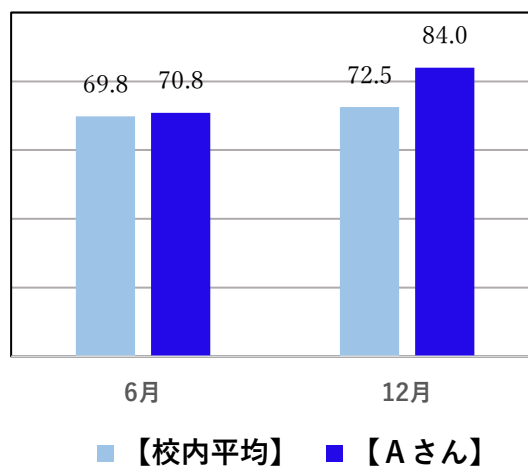
①ノートのととり方の練習と声掛け

自立活動の時間にノートのととり方の練習をしたことにより、短い文であれば一文を覚えて一気に書くことができるようになった。時間内に全ての板書を書き写すことができたこともあった。また、Aさん自身が自で「ノートをとる場面」と「話を聞く場面」を区別できるようになり、与えられたノートをとる時間に間に合わなくなると、「先生、ノートをお願いしてもいいですか。」と続きを教師に頼み、前で話すT1の話を聞くこ

学力テスト【算数】正答率



学力テスト【国語】正答率



とができるようになった。今では「1時間に1回の挙手」という目標を立て、発言することもできるようになった。分からないところはタイミングを見付けて担任へ聞く、という習慣もついたため、学習面での苦手分野を克服することもできた。また、学力テストの成績が著しく上がっており、ノートのとり方の練習と担任の声掛けは、Aさんの学力の向上に有効な支援であったと言える。



協力学級での授業

②机と椅子の整備

正しい姿勢を保つための工夫をすることで、傾かず正面を向いていられる時間が増えた。それにより、字を書くスピードが上がったり、以前よりも整った字を書いたりすることができるようになった。また、体が傾かないため、机から物を落とすことも減り、物を拾う時間も短縮されて長い間授業に集中することができるようになった。何よりAさん自身が座っているのが楽になったと感じていたため、机と椅子の整備はAさんの学力向上に必要な支援だったと考える。

(3) 継続した交友関係の充実化のために

①特別支援学級の開放

Aさんの自立活動の様子や、目標達成状況を教室に掲示したことにより、他の児童の来室が増えた。同学年の児童はもちろんのこと、他学年、男女関わらず、たくさんの児童が来室するようになった。教室掲示を見て、「Aさんってすごいな!」「Aさんってこんなこともできるんだな!」と言われ、Aさんはたくさんの児童から称賛されるようになった。また、友達から「次の目標は何?」と聞かれたこともあり、次の目標への意欲向上へとつながった。そのため、昨年以上に友達

から慕われ、Aさん自身がいろいろな児童に話し掛けることができるようになった。Aさんができるようになったことを他の児童に伝えることで、Aさんの交友関係を広げることもつながった。



友達と風船バレーを楽しむAさん

②作品作り

休み時間、他の児童が来室すると、Aさんが自立活動で作った折り紙の作品の折り方を教えて一緒に折ったり、風船バレーで対決したりして楽しんでいた。

また、「東京2020オリンピック・パラリンピックに向けたポスター募集」の作品作り（※添付資料1参照）では、手指の運動としてちぎり絵で制作した。パラリンピックの動画を観たり、実際にパラリンピック競技を体験したりしてから制作に取り掛かった。完成した作品を教室に掲示したり、作品に対するAさんの思いを他の児童に伝えさせたりすると、児童から「すごい!すごい!」と称賛された。この作品は、全国約14,000点の中から最高賞の金賞に輝き、それを他の児童へ報告し、児童から称賛されると、Aさんは自信に満ちた表情を浮かべた。この表情から、Aさんの活躍を、作品作りを通して伝えたことは、Aさんの自信を深めることに有効であったと言える。



完成したポスター作品

③町民弁論大会への参加

女川町民弁論大会（※添付資料2参照）では、これまで、自分の障がいについて人に伝えることを避けてきたAさんが、いろいろな挑戦と達成感により自信がつき、自分の障がいや、これまでの悩み、これからの障がい者が暮らす理想の社会について堂々と述べることができ、見事最優秀賞を受賞した。この弁論を全校児童の前でも発表し、教室にも掲示して、他の児童がAさんの弁論を聞いた感想を書けるよう、コーナーを設けた。それにより、廊下ですれ違った1年生の男子児童から「Aさん、足、大事にしてね。」と声を掛けられ、Aさんは「私の思いが伝わった。」と喜んでいて、また、教室の弁論感想コーナーへの感想に、「そのように思っていたなんて、知らなかったよ。」「Aさんの思いが分かったよ。」などと書かれており、他の児童の障がい理解へもつながった。それ以来、Aさんは自分の足のことを隠さずに友達に伝えることができるようになり、友達へ助けを求めやすくなったという。このことから、このタイミングで障がいについて弁論を通して伝えさせたことが、Aさんにとって学びやすい環境づくりにつながったと考える。



校内の弁論発表

6 今後の課題

体力・学力の向上、交友関係の充実化により、一年間、自立活動以外の教科を協力学級で他の児童と同じように共に学ぶことができた。また、Aさんの表情も明るくなり、無理せずに自分のペースで共に学ぶことができるようになった。

平成30年6月、Aさんは、テレビ朝日「サンデーLIVE!」のテレビ取材（※添付資料3参照）を受け、

元プロテニス選手の松岡修造さんと対談した。内容は、パラリンピックのポスター制作についてのことや、Aさん自身の障がいへの向き合い方についてであった。その場でAさんは、「私は、自分の可能性を広げたい!」と堂々と宣言した。一年前のAさんからは考えられない言葉だった。

一年間の自立活動を通して、自分の力を認め、自分に自信がついたことで、これから先の可能性にも目を向けることができたのであろう。これは、一年間の自立活動の成果であると感じている。

しかし、たくさんの人々と共に生活するにあたって、これからは中学校、高校への進学や社会進出など、これまでの小集団ではなかった新たな悩みや壁に遭遇するであろう。そのようなときに自分の力で乗り越えたり、必要なときには人の手を借りたりする、気持ちの面での更なる成長が必要である。

「共に学ぶ」ことができるようになった今、これからは更に視野を広げ、家庭や関係機関と連携し、「共に生活する」ことができるための支援を展開していく必要があると考える。

※本稿は、本人・家族の承諾を得て、掲載しています。

【添付資料】

- 1 東京2020オリンピック・パラリンピックに向けたポスター企画 金賞作品について
- 2 女川町民弁論大会原稿
- 3 テレビ朝日HP掲載ページ「テレビ朝日サンデーLIVE!」について